

透明性が信頼たる医療をもたらす

医師 藤澤康聡

現役の心臓血管外科医として、この度のお話しはまさに自分事として終始身につまされる思いで拝聴しました。

医療者は誠実に仕事をし、患者を病魔から解放します。その過程で医療者はやりがいを感じ、患者には感謝の念が生まれます。しかしひとたび事故が起きてしまうと気持ちの表と裏がひっくり返り、加害者と被害者に分断され贖罪と遺恨に苛まされることとなります。

実際、医療事故を契機に重度の鬱になった同級生の内科医、第一線を退いてしまった後輩外科医、退職せざるを得なくなった優秀な看護師が身近にいました。彼らは事故がなければ地域医療に大いに貢献したでしょうが、一つの事故が人生をかくも大きく変えてしまいました。

事故を起こしてしまった事実は決して消え去るものではありません。しかしそこに悪意はないのですから、被害者の思いをしっかりと抱えつつ、事故後も持てる能力を十分発揮できるような仕組みづくり（ピアサポートなど）の一層の拡充が求められます。また近年は医療技術の進歩とともにその複雑性も如実に高まっていて、事故・過誤が起きるリスクも高まる一方ですから、IT・AIの活用や働き方改革などによる事故防止施策は、国策として積極的に進められるべきだと思います。

カルテを連携医療機関に公開する病院も増えてきましたし、オンライン資格確認で他院の薬剤情報や診療行為が閲覧出来るようになりました。また近年、インフォームドコンセントの重要性が広く周知され、診療ガイドラインも次々に作成されています。まとめて解決できるような方策は存在しませんが、こうした透明性の高い取り組みが広がることで、情報の隠蔽やブラックボックス化が過去のものとなり、医療者と患者の信頼関係のもとで誠実な医療が授受できる社会になっていくことを期待します。

米国訪問のお話しのなかで、「犯人捜しをしない」取り組みについて教えていただきましたが、個人主義、訴訟社会の国でその考えが受け入れられているのが意外でした。全体主義的なわが国の方が受け入れられないのかも、と少し心配になりました。マスク警察（自粛警察）が現れるような国ですから。

貴重な講演、ありがとうございました。